

# 英語史における結果構文の発達について

玉田 貴裕

## 1. はじめに

本稿では、古英語から中英語にかけての英語の結果構文の発達に焦点を当て、考察を行う。

## 2. 結果述語の含意的階層

影山は、主動詞の意味的な性質に基づき、結果述語を大きく次の4つのタイプに分類している。①結果述語の内容が主動詞のLCSに記載されている「本来的結果述語」(例: freeze solid、wash clean)。②結果述語が表す状態が主動詞の表す動作の目的として指定されている「準本来的結果述語」(例: wipe clean、shake awake)。③結果述語の内容が主動詞の語彙情報に含まれていない「派生的結果述語」(例: kiss awake、water the tulips flat)。④イディオム(例: drink someone under the table)。これらのグループは含意的階層を成しており、例えば準本来的結果述語を許容する言語は同時に本来的結果述語も許容する。影山は、Visser (1963)のデータから数例取り上げ、古英語の時代には本来的結果述語しかなく、派生的結果述語は初期近代英語のあたりから発達してきたと推測している。しかし、具体的な検証はされていない。以下ではBroccias (2008)、神谷 (2010)によるコーパス調査で得られたデータに基づき、古英語・中英語の結果述語のタイプの検証と発達についての考察を行う。

## 3. 古英語の結果構文

Broccias は、Visser のデータを検証し、古英語の結果構文として5例 (awascan clæne (lit. “wash clean”), feormian clæne (lit. “cleanse clean”(=1)), feormian fæger (lit. “cleanse fair”), gescearfian smæl (lit. “shred small”), gnidan small (lit. “crush small”(=2))) を認めている (ただし、いずれも結果述語が副詞であるか、または副詞と形容詞で曖昧である。通常結果述語は形容詞か前置詞句で現れることを考えると、これらの例は典型的な結果構文とは言えない。Broccias (2008: 35-37)の議論を参照)。

- (1) *Feormige man þone pyt clæne*  
‘let the well be purged’ (Ancient Laws (Thorpe) ii, 220, 20)
- (2) *Geniman þa ylcan wyrte, scerfa hy þonne, and gnid swiþe smale to duste*  
‘Take the same herb, then shred it, and crush it very small, to dust’  
(Leechdoms (Cockayne) i, 70, 14)

一方で、Broccias はコーパス調査で結果構文を2例 (blawan fulle (lit. “blow full”(=3)), todælan smæl (lit. “cut off small”)) 抽出している。そのうち(3)に示す例は結果述語が確実に形容詞の例である。

- (3) *Ælces mannes miht þe on modignysse foerð is soðlice þam gelic swilce man siwige ane bytte, and blawe hi fulle windes*  
‘The power of every man who behaves proudly is truly similar to the way one sews a bottle and blows it full of air’ (coelive, ÆLS [Cecilia]: 315.7296; Broccias (2008: 41))

用例が少ないという問題は残るが、これまでに見つかった古英語の結果構文の例を見ると、どれも動詞が変化結果を含意している。したがって影山の推測通り、古英語の時代には本来的結果述語しかなかったとみなすことができる。

## 4. 中英語の結果構文

Visser は中英語の結果構文の種類を17例を挙げ、実例を25例挙げている。。

- (4) *beaten smal, bursten ope, chewen small, choppen small, dyen green/blue, eaten (the earth) bare, floberen foul, grinden small, painten black, rubben ruddy, searcen smothe, shaven smothe/clene, swepen clene, shriven clene, strippen naked, washen clene, wipen clene/dry*  
(cf. 神谷 (2010: 7-8))

Visser のデータには、わずかだが beat black and blue や wipe clean のように、準本来結果述語に分類される結果述語が含まれている。それぞれの具体例を(5)に示す。

- (5) a. *Bett hym blak and bloo.*  
‘Beat him black and blue.’ (Towneley Myst. 206)

- b. Wassce and *wipe wol clane ða eigene.*

‘Wash and wipe the eyes thoroughly clean’

(Vices & Virt. 125)

一方、神谷 (2010)は独自のコーパス調査で 31 例 (Visser のデータとの重複を除けば 29 例)の結果構文の生起例を抽出し、(6)の 11 例の結果構文を(4)に加えている。

- (6) *bake hard and stark, color blue, cut smaller/short, hew small, pierce full, put open, shut fast, stamp small, strike blind, tobreken smaller, well hot.* (cf. 神谷 (2010: 20))

そのうち準本来的結果述語と考えられる例は以下の 2 例のみである。したがって、中英語では準本来的結果述語は極めて稀であったと考えられる。

- (7) a. *tyll God stroke hym allmoste blynde.*

‘till God struck him almost blind’

(CMMALORY,660.4643)

- b. *and put open þe zeate so hard, þat all þat weren yn þe halle, werne astonyet.*

‘and was pushing the gate so hard to open it that all who were in the hall were astonished’

(CMMIRK,10.260)

中英語で準本来的結果構文が稀であった原因を探る手がかりの一つとして、古英語・中英語の結果構文は結果述語が修飾されていたり等位接続されていることが多いという事実に注目できる。Visser のデータでは 25 例中 12 例、神谷のデータでは 29 例中 20 例の結果述語が何らかの修飾を受けているか、他の結果述語と等位接続されている。修飾や等位接続によって結果述語の情報量を増やすことで結果構文の容認度が上がる現象は通言語的に見られる。(8)は英語の例、(9)はイタリア語の例である。

- (8) a. ??I wrote the letters long.

- b. ?I wrote letters long and beautiful.

- b. I wrote the letters so long no one could read them.

(Napoli (1992: 80))

- (9) a. \*Ho stirato la camicia piatta.

‘I ironed the shirt flat.’

- b. Ho stirato la camicia piatta piatta.

‘I have ironed the shirt flat flat (= very flat).’

(Napoli (1992: 76))

中英語では結果述語の修飾・強調や等位接続によって動詞の表す結果状態に十分に焦点が当たらないと結果構文が成立しにくかったと考えることができる。本来的結果述語に比べて準本来的結果述語が圧倒的に少ない理由は、両者がそれぞれ修飾する主動詞の LCS の違いと中英語の言語的な傾向によるものと考えられる。本来的結果述語を取る動詞の LCS は[x ACT] CAUSE [y BECOME z]であり、元々結果述語が入るスロットがある。一方、準本来的結果構文の LCS は[x ACT]であり、結果述語が入るスロットは概念構造の合成によって獲得しなければならない(影山 (1996))。しかし中英語では主動詞の表す動作に対して終点が際立ちにくく背景化されているため、合成が起こりにくい。

## 5. おわりに

本稿では、古英語と中英語のデータを検証し、古英語までは本来的結果述語しか現れないが、中英語から準本来的結果述語が現れたことを確認した。前者に比べて後者が圧倒的に少ないのは、主動詞の LCS の違いと動詞の表す動作の終点が際立ちにくい中英語の傾向によるものであると主張した。

## 参考文献

Broccias, Cristiano (2008) “Towards a history of English resultative constructions: the case of adjectival resultative constructions,” *English Language and Linguistics* 12, 27-54. 影山太郎 (1996)『動詞意味論』, くろしお出版, 東京. 影山太郎 (2007)「英語結果述語の意味分類と統語構造」, 小野尚之(編)『結果構文研究の新視点』, 33-66, ひつじ書房, 東京. 神谷昌明 (2010)「古英語・中英語に現れる結果構文の抽出 : 通時的英語コーパス YCOE と PPCME 2 を利用して」, *Claritas* 22, 5-26 Napoli, Donna Jo (1992) “Secondary Resultative Predicates in Italian,” *Journal of Linguistics* 28, 53-90. Visser, F. Theodor. (1963) *An Historical Syntax of the English Language, Part One*, E. J. Brill, Leiden.